

～子どもに関わるすべての人へ～
家庭教育ニュースレター

家族の絆

2016年春 = Vol.50 =

Contents

- 「あーよかったな あなたがいて～すべての人に贈りたい言葉～」
- 特集 にしのみや人権フォーラム～ふれあいの広場～講演会レポート
「ものがたりを通してやわらかな関係づくり ～絵本の読みあいら～」
- 5つの実践目標リレーコラム「『あいさつの心地よさ』を家庭から」
- 「5つの実践目標」が市内を走り出す！

発行／西宮市教育委員会 問合せ先／社会教育課 TEL0798-35-3868



あーよかったな あなたがいて ～すべての人に贈りたい言葉～

平成18年度より10年間にわたり、「西宮市家庭教育振興市民会議」の議長・副議長として、本市の家庭教育の振興にご尽力いただいた「教育サポーター 仲島正教」さん。

今回は、その仲島さんから、子育て真っ只中の方、地域で子どもを見守り育てている方など、子どもに関わるすべての人へメッセージをいただきました。

▼人を幸せにする一言

私はこれまで講演会を数多くしてきましたが、その演題はすべて「あーよかったな あなたがいて」です。講演の対象者がPTAの時も教職員の時も子どもの時も一般や高齢者の時もすべてこの題ですし、内容が子育てであろうと人権教育であろうと授業づくり学級づくりであろうといつもこの題を使っています。それはこの言葉が人を幸せにするからです。

私が教師になって5年目、初めて6年生を担任し卒業式を迎えました。式の途中も涙がこぼれましたが、終了後の教室でA子からの「あーよかったな 先生と会えて」の言葉に号泣してしまいました。新任5年目のまだまだ未熟な私にその一言は、教師としてやっていく覚悟と大きな幸せを与えてくれました。それ以来、私は子どもたちにもその言葉を贈り続けました。どんなにやんちゃな子どもでもこの一言をかけると笑みを浮かべます。

▼講演会の宿題

講演会の最後に私はいつも宿題を出します。
「ここに来てくださった方々はみんな私のクラスの子供です。今から宿題を出すので必ずして下さいね。今日、家に帰ったら家族全員に『あーよかったな あなたがいて』を言うのです、それが宿題です。小学生以下の子どもには10秒間抱きしめながら言ってあげてください」

後日、お母さんから感想が寄せられました。
「小2の次男をギュッとして『〇〇がいてよかった』と言うといつものはなかなか手洗いに行かないのにすぐに行きました。こんなに

素直になるのかとビックリしました。小4の長男にすると、いつも以上にしゃべる弟の面倒をみてくれました。すごい効果です」

▼「その一歩」「私の一歩」

昨年10月末に実施した「西宮市家庭教育フォーラム」で、私は参加者のみなさんに

「『出来るか出来ないかではなく、するかしないか』です。とにかく『その一歩』を踏み出しましょう。『その一歩』がこれからの生活をきっと幸せに導いてくれますから」そう提案して参加者のみなさんに『私の一歩』を表明していただきました。

「私は帰ってからすぐに子どもを10秒抱きしめます」
「子どもの話を、手をとめて聞いてみます」
「お風呂で『あーよかったな』の歌を歌います」
「夫にも『あなたがいてよかった』って言ってみます」
「『10秒の愛』を頑張ります」

そのあとに、私はもう一言付け加えました。
「でも無理はしなくていいですよ。10回中10回出来なくてもいいのです。10回中3回出来れば上出来です。3割出来たら、プロ野球では首位打者なのですから」

▼優しい言葉には優しい言葉が返ってくる

「家庭教育フォーラム」に参加していたお母さんからこんなお話も聞かせていただきました。

「毎朝子どもが出かける時は、いつも笑顔で『いってらっしゃい!』をしています。どんなにしんどくても機嫌が悪くてもその時だけは笑顔で見送ります」

そのお母さんは、誕生日に我が子からプレゼントをもらったそうです。木製の写真立てでしたが、中には写真ではなく、我が子の精一杯の字が書いてありました。

「お母さん いつも笑顔で送り出してくれてありがとう。咲哉」

素敵なお母さんと素敵な子どもに大きな拍手です。

なかじま まさのり
仲島 正教

教育サポーター

西宮市立小学校教諭(21年間)・西宮市教育委員会指導主事(5年間)を経て、48歳で早期退職。その後、全国各地で講演会やセミナーを行っている。



10秒の愛

子どもって、忙しい時に限って寄ってきます。
子どもって、なかなかかささぎとできません。
子どもって、なかなかかはつきりと言えません。
でも、
たった10秒でもいいのです。
まず子どもを抱きしめてあげて下さい。
たった10秒でもいいのです。
「早く!」って言う前に待ってあげて下さい。
たった10秒でもいいのです。
せかさずにじっと聞いてあげて下さい。
すると、そこに「笑顔」が生まれます。
そこに「つながり」が生まれます。
たかが10秒、されど10秒
「10秒の愛」は、子どもを幸せにするのです。

●にしのみや人權フォーラム～ふれあいの広場～講演会レポート●

ものがたりを通してやわらかな関係づくり

～絵本の読みあいから～



「絵本の読みあい」って何でしょうか？

「絵本の読み聞かせ」はよく耳にしますが、「絵本の読みあい」は何だか聞きなれない言葉ですね。

全国で様々な人と「絵本の読みあい」に取り組んでおられる村中李衣先生（児童文学作家・絵本作家）によると、「読みあい」は、その形や方法が決まっているわけではないとのこと。

う～ん、ますますわかりません。

ということで、“百聞は一見にしかず”。

2015年12月9日（水）に西宮市立中央公民館で行われた村中先生の講演会に参加し、「絵本の読みあい」を体験してきました。

♣絵本の新たな可能性

「絵本の読みあい」とは？

「がたん ごとん がたん ごとん」「のせてくださーい」
村中先生による「絵本の読みあい」が始まりました。「読みあい」のために村中先生が手に取った一冊の絵本。それは、『がたん ごとん がたん ごとん』（安西水丸／作、福音館書店）。「がたん ごとん」と走る汽車が、「のせてくださーい」とお願いしてくる「哺乳ビン」、「コップとおさじ」、「りんごとバナナ」、そして「ねことねずみ」を次々と後ろにのせ、終点へと向かって走るというお話です。「がたん ごとん がたん ごとん」と「のせてくださーい」の繰り返しのリズムがとても楽しい絵本です。

さて、「読みあい」と言っても、何か特別なことをするわけではありませんでした。基本は「読み聞かせ」と同じです。読み手である村中先生が、参加者のみなさんの前で、ものがたりを声に出して読み進めていきます。

しかし、「読み聞かせ」と違うところは、読み手である村中先生が最初から最後まで一方的にものがたりを読むのではないということです。ものがたりの途中で少し立ち止まり、読み手と聞き手が対話をします。どういうことかと言うと、例えば、絵本の中で「哺乳ビン」が、汽車に「のせてくださーい」とお願いする場面があります。このとき、村中先生は、参加者のみなさんに、「哺乳ビンさんがのせてほしいって言っているよ。どうする？のせてあげる？」と尋

ねます。すると、参加者のみなさんが、「いいよ!」「どうぞ!」などと口々に答えます。村中先生は、その反応を見ながら、「ありがとう」と言って、次のページへ読み進めるのです。このように、「読みあい」は、みんなで一つのものがたりを読み、途中で自由に会話も楽しみながら、その場にいる人と時間を共有することだったのです。そこには、「絵本を読んでいる人」と「絵本を読んでもらっている人」という区別はありません。その場にいる全員が「絵本の読み手」です。そして、一冊の絵本を通して、そこにいるすべての人の心と心がゆるやかにつながっていく。「読みあい」は、そんな「場」づくりです。

『「読みあい」のとき、絵本はこう読まなければいけないというマニュアルにとらわれなくて。一番大切なことは、誰と何を大事にして絵本を読みたいかということ。』と村中先生。最近、私たちは何でもかんでも“マニュアルどおり”になりすぎていませんか？もちろん何事も基本を押えることは大切なことです。しかし、一番大切なことは、その場の状況や相手をしっかり見て、聞いて、感じて、受入れ、つながっていくことではないでしょうか。「絵本の読みあい」を通して、そのことに気づかされました。



♣ものがたりを読むということ

ところで、「ものがたりを読む」ってどういうことでしょうか？『『ものがたりを読む』という事は、本気で嘘の世界に出会う体験』と村中先生は言います。みなさんの頭の中が“？”でいっぱいになったところで、村中先生が次に取り出した絵本は『パパ、お月さまとって！』



(エリック・カール／作・絵、もりひさし／訳、偕成社)。この絵本は、娘に「パパ、お月さまとって！」とお願いされたお父さんが、ながーいながーいはしごをたかーいたかい山のてっぺんに立て、お月さまをとってくるというお話です。

みなさんは、このお話を聞いて、本当にそんなことができると思いませんか？おそらく、誰もが「できるわけがない」と思ったことでしょう。もちろん、このものがたりは大嘘（フィクション）です。そんなことは、大人だけでなく、子どもにも分かっています。しかし、村中先生が出会った子どもの中には、この絵本を『嘘をつかないお父さんの本』と言う子がいるそうです。それも一人ではなく、何人もなぜでしょうか？

村中先生によると、それは、子どもたちがものがたりを通して、「このお父さんは嘘をつかない」ということを読み取っているからだそうです。確かに、このお父さんは、ものがたりの中で大切な娘との約束をきちんと守り、お月さまをとってきました。これに嘘偽りはありません。子どもにとっては、それこそが重要なのです。だから、ものがたりそのものがどれだけ嘘であっても、子どもはこのお父さんを「嘘をつかないお父さん」と言うのです。

「子どもは嘘の世界を本気で生きる仲間を求めている。」と村中先生は言います。子どもにとって、現実の世界は、楽しいことや嬉しいことばかりではありません。時にはつらいことや悲しいこともあります。しかし、そんなとき、絵本を開けば、いつでも子どもはものがたりの世界で自由に生きることができます。なぜなら、絵本は「どんなに大変なことがあっても、それを乗り越えれば必ず希望が見える」と信じさせてくれるからです。子どもは、絵本からたくさんの勇気と希望をもらっているのです。

「もちろん、ものがたりにはやがて終わりがきて、子どもは現実の世界に戻らなければならない。でも、またいつでも絵本の世界に入ることができる。」と村中先生。私たち大人は、子どもと一緒にそう信じながら、絵本と向き合う子どもをしっかりと見守りたいものです。

♣がんばりすぎない子育てを・・・

子供について

そこで、子供を胸にかかえた女が言った。お話をください。子供のことを。

アルムスタファは言った。

あなたの子は、あなたの子ではありません。

自らを保つこと、それが生命の願望。そこから生まれた息子や娘、それがあなたの子なのです。

あなたを通してやって来ますが、あなたからではなく、あなたと一緒にいますが、それでいてあなたのものではないのです。

子供に愛を注ぐがよい。でも考えは別です。

子供には子供の考えがあるからです。

あなたの家に子供の体を住まわせるがよい。でもその魂は別です。子供の魂は明日の家に住んでいて、あなたは夢のなかにでも、そこには立ち入れないのです。

子供のようになろうと努めるがよい。でも、子供をあなたのようにしようとしてはいけません。

なぜなら、生命は後へは戻らず、昨日と一緒に留まってもいません。

あなたは弓です。その弓から、子は生きた矢となって放たれて行きます。射手は無窮の道程にある的を見ながら、力強くあなたを引きしぼるのです。かれの矢が速く遠くに飛んで行くために。

あの射手に引きしぼられるとは、何と有難いことではありませんか。

なぜなら、射手が、飛んで行く矢を愛しているなら、留まっている弓をも愛しているのですから。

出典：カリエール・ジブラン(1990)、預言者 至光社



これは、『預言者』(カリエール・ジブラン／著、佐久間彪／訳、至光社)という詩集から、「子供について」という一篇です。講演会の最後に、村中先生がこの詩を朗読してくださいました。

親は大切な我が子の幸せを願うあまり、ついつい子どもには「ああなってほしい」「こうあってほしい」と理想の生き方やあり方を期待してしまいます。ときには、自分のことを棚に上げ、「なぜこれができないの？」と、悩んだり文句を言ったりすることがあるかもしれません。しかし、子どもの未来を決めるのは、子ども自身です。親は、将来子どもが社会へ力強く羽ばたいていけるように、丈夫で折れない、強い「弓」であればよいのです。ただし、そのとき決して一人だけががんばろうとしないでください。つらいときや困ったときは、遠慮なく周りの人に頼ってください。

“人と人とのつながりの中で、みんなで子どもの巣立ちを温かく見守る子育てを・・・” この詩は私たちをそう励ましてくれているような気がします。

思いやりのある西宮っ子を育てる

5つの実践目標 リレーコラム

平成23年に西宮市家庭教育振興市民会議が新たに提唱した家庭教育の「5つの実践目標」をテーマとして、家庭教育振興市民会議の委員や家庭教育関係者などに自身の体験や思いを投稿していただくリレーコラム。今号は、5つの実践目標の中から「声かけよう おはよう ありがとう ごめんなさい」をテーマに、「武庫川女子大学 准教授 佐々木春美さん」にお話しいただきました。

「5つの実践目標」

- ・育てよう 優しい心と がんばる力
- ・声かけよう おはよう ありがとう ごめんなさい
- ・見守ろう よその子 我が子 区別なく
- ・習慣づけよう 早寝 早起き 朝ごはん
- ・外に出よう 元気に遊んで 友だちいっぱい

『あいさつの心地よさ』を家庭から

あいさつの素晴らしさは、誰もが認めるところです。子どもたちからも「あいさつすると笑顔になるし、友だちも増えるよ。」という声を聞くことができます。でも、実際の場合では…。

学校などの集団生活では、「おはようございます!」「ありがとうございました!」など声をそろえてあいさつする場面がよく見られます。しかし、日々の生活を考えると、一人であいさつすることの方が圧倒的に多いのです。素直に、自分の言葉で、そしてタイミングよくあいさつをすることは、子どもにとってなかなか高いハードルです。

ところで、あいさつには『心を開く』という意味があるそうです。お互いを認めることからあいさつの気持ちが生まれ、あいさつをすることで、お互いが安心し

て心を開くのです。それでは、子どもたちが一番安心してあいさつできる相手は誰でしょうか。それは、何と言っても家族です。家族だからこそ安心してあいさつができます。他人行儀?ではありません。あいさつすることでさらに絆が深まることにもなるでしょう。子どもたちには、あいさつする気持ちよさを、家族とともに何度も実感してほしいと思います。

家庭の中で感じた心地よさは、きっと学校に地域に広がっていくのですから。

ささき はるみ

佐々木 春美

武庫川女子大学 准教授

公立小学校教員を経て現職。大学では算数科教育とともに、保育士や幼稚園・小学校の教員をめざす学生の教職支援を担当している。



「5つの実践目標」が市内を走り出す!

西宮市教育委員会と西宮市家庭教育振興市民会議は、家庭教育の「5つの実践目標」を啓発するため、このたび、「5つの実践目標啓発マグネット」を作製しました。

マグネットの種類は、全部で5種類。それぞれのマグネットには、思いやりのある西宮っ子を育てるために、私たち大人がみんなで実践していきたい5つの目標が一つずつ書かれています。

現在、このマグネットを貼った数十台の公用車などが、市内を走っています。ぜひ5種類すべてのマグネットを見つけてみてください。そして、マグネットを見かけたら、どれか一つでもよいので、そこに書かれてある目標に、みなさんの家庭、学校、地域で、取り組んでいただけたらと思っています。

今後も、西宮市教育委員会と西宮市家庭教育振興市民会議は、様々な形で「5つの実践目標」を啓発してまいります!



編集後記

いつも「ニュースレター『家族の絆』」をご覧いただき、ありがとうございます。

(巻頭)仲島正教さんのメッセージの中で「10秒の愛」をご紹介しましたが、よろしければみなさんも一度お子さんに実践してみたいかがでしょうか。

手をつないだときや、抱きしめられたときに感じ取った“ぬくもり”は、きっと子どもたちの心の中にしみこんでいくものだと思います。そして、その“ぬくもり”は、子どもたちが将来、壁にぶつかったときや、くじけそうになったとき、そっとエールを送ってくれるはずですよ。

社会教育課では、今後もみなさんが家庭や地域で子どもたちと向き合うときのお役立ち情報をお届けします。

